
愛の値段

どくだみ猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛の値段

【Nコード】

N3473Z

【作者名】

どくだみ猫

【あらすじ】

美しく奔放な母と、その母に幼い頃から振り回される主人公「山崎心愛」

母親は、高齢な資産家である高坂氏の愛人となる。高坂家の一族には憎まれ、母親には邪魔者にされ、住む家もなく路頭をさ迷う主人公に手を差し伸べたのは、高坂家の三男と名乗る人物であった。

「あなたのお母さんと仲良くしたいと思っていますよ。手伝っていただけませんか？」

果たして薄幸のDQNネーム少女に幸せの鐘はなるのか!?!?というお話です。

追想？（前書き）

先のことをよく考ええず書いています。お付き合い頂けると嬉しいです。

追想？

母がろくでもない人間であることは、13歳の頃には既に確信となっていた。そのろくでもない母の下劣な血は自分の体で常に脈打ち、それでも生きていかなければならない自分を哀れに思つて、サロ（犬）に顔をうずめて泣いたのは、中学1年の冬であつた。

その日も母は家に居なかつた。母の帰りはいつも午前過ぎで、帰らない日も多かつた。私の夕飯は幼いときから、コンビニ弁当かスーパーの見切り品か冷凍食品であつた。もつとも中学生にあがる頃には、自分の家の異常性を十分自覚していたので、せめて食事ぐらひは普通にと、代表的家庭料理を自炊し、一人で食べていた。

夕食時の午後7時、私は、にくじゃかとほうれんそうのおひたしとご飯とあさりの味噌汁をテーブルに美しく並べ、テレビと一緒にモソモソと食べていた。時々外から聞こえる、子供と大人の楽しそうな会話をうらやましく思うような時期はもうとくに過ぎた。そのとき考えていたのは、親友の光恵から相談された家庭問題と、今日は母が帰ってくるのかという事だ。母がもし今日帰ってくるなら明日のお弁当の分の肉じゃがはないから、ウインナーでも炒めておこうかなとつらつら考えていたとき、電話のベルがけたたましくなつた。親友の光恵からであつた。

「もしもし、伊集院です。すいません。こつ心愛ちゃん、います？あつ！私、クラスメイトです！」

「・・・光恵？お、私だよ。うん、私、私。やまだよ。どうしたの？…なんかあつた？」

光恵は私だと分かり、一気に緊張が取れたのか、号泣しながら話出した。

「やまあー！ー！！ううっ、ごめん。やまの声きいたら、なんか、ううっどうしょー。私どうしょー。ぶううっ、えええええううっ。」

おとうさんとおかあさんがあー!!」

40分に渡る光恵からの電話を要約すると、両親が大喧嘩して母親が実家帰って父親も出て行ってわたしどうしよう一人怖いという話であった。

「それならウチにきなよ」

と私は答えた。そうだ、分かっている。一昨日も昨日も、そしてきつと今日も母は帰ってこない。肉じゃがを食べてくれる人が出来て私はうれしかった。

セーターとマフラーとコートで着膨れし、泣きはらしてフグのような顔になった光恵を、私は外で出迎えた。傾いた「山崎」の表札を恥ずかしく思い、光恵の様子を伺ったが、彼女は周りのことなど目に入れる余裕などない思いつめたフグの表情であった。私はアパートの扉を開けた。

「ごめんね、汚い部屋で。」

と、極彩色の服が散乱する部屋を眺め私はつぶやく。

「いいよ・・・こちらこそ、突然きちゃったし。なんにもしないでいいから。なんにもしないでいいから。本当に、ありがとう。やまのおかげで、うつつ・・・!」

再び興奮する光恵をなだめて、にくじゃがを振る舞い、風呂をいれて、その後一緒にホットミルクを飲みテレビを見ると、夜はあつという間に更けていった。最後に布団を一緒に並べ、ぬくぬくと温まりながら、暗い闇の中で、私はけいこの鼻声を延々と聞いていた。「それでね、お父さんが浮気してた事、私ずっと前から知ってたって言ったじゃん。そう、それでその事でお母さん超怒っちゃって、でもそれについてはお母さん後で謝ってくれたんだけどね。でも、光恵としてはやっぱりすぐに言うべきだったんだって超後悔だったし。私としてはお父さんもお母さんもどっちも好きなんだけど、ずっと隠してたこととお母さんに嫌われちゃったし。お父さんも光恵のせいで、浮気がバレたって思ってるよ。二人ともお互いのこと嫌いに

なっちゃったし、光恵のことも嫌いになっちゃったし、どうしよう離婚しちゃう。わたしのせいで離婚しちゃう。うん・・・、やまのいう様に愛人が悪いんだけどさ、うっちゃりそう思っちゃう自分もいるじゃん？消せないじゃん？うん、あとさ、今日分かったんだけどお父さんね、自分の愛人にお金渡しててさ、うん。なんか、よくわかんないんだけど二百万・・・ぐらい・・・とか、どうしよう、私の高校行くお金残ってるのかなどうしよう。それでさ、お父さんの会社でもね」

ほとんどが以前聞いた話の繰り返しでもあったが、私はまったく苦痛ではなかった。まどろみながら友人の声を聞くひとは、むしろ幸福であった。

朝起きると、驚くことに母が帰ってきていた。廊下にストッキングと毛皮のコートを脱ぎ散らかし、ダイニングの床で布団をかぶって寝ている母がいた。私が声をかけると、母は目を閉じたまま返事をする。

「あ~~~~、ここあ、ひさしぶり~~~~。うん、ママ今かえってきたところ。お酒はね、今日はそんなに飲んでないから~~~~、大丈夫~~~~。」

「お母さん、あのさ、友達、来てるんだけど・・・。いい？」
母はその一言で「え!？」と言って起き上がると、メイクしたままの顔を私に向けた。光恵は私の後ろで驚いた顔で母を見つめている。母は華やかな笑顔で光恵に笑いかけた。

「あらっ。ごめんね、変なところみせちゃってえ。気にしないでいいから、ゆつくりしていつてね〜!」

母はいそいそと起き上がると、風呂場に行き、化粧を落とし、着替えをして、また整えて、朝の支度を終え学校に向かう私達をさわやかに見送った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3473z/>

愛の値段

2011年12月11日22時59分発行